

令和2年度

小・義務教育・特別支援学校

若年教員研修1年目 第3回・4回

教科等の学習指導Ⅱ（生活科） 教科等の学習評価と改善Ⅱ（生活科）

配布資料



福岡県教育センター

0 1 共創しよう!
教育の未来

Produce from 0 / Fukuoka Prefectural Education Center

1 生活科とは	_____	2
2 生活科の授業づくり8つの手順		
①子供の実態を把握	_____	4
②内容の分析	_____	5
○指導と評価の一体化	_____	7
○学習評価	_____	9
③教材（対象）	_____	10
④単元構成	_____	11
⑤一単位時間の基本的な学習過程	_____	11
⑥本時の具体的な活動	_____	12
⑦板書	_____	13
⑧発問（声かけ）	_____	14

生活科の学習は、子供が対象（生活事象）への思いや願いをもって働きかけ、働きかけたことから気付く（知的面、情意面）という双方向性のある活動を大切にします。

生活科の学習を進める上での課題の一つとして、「活動あって学びなし」ということが言われています。つまり、「子供たちは楽しそうに活動しているが、何を学んだのか分からない。」という現状が日々の授業で見られるということです。

生活科は「為すことによって学ぶ」。つまり、活動を通して、対象を自分とのつながりで捉えることを大切にします。そこで、大切になるのは「思いや願い」です。対象へ働きかけたいという動機を生み出す「対象への思いや願い」がない状態で、活動を行うことが、「活動あって学びなし」へとつながります。右図①のように、思いや願いをもって対象（生活事象）へ働きかけながら、対象と自分とのつながりに気付くことができるような生活科の授業を大切にしましょう。

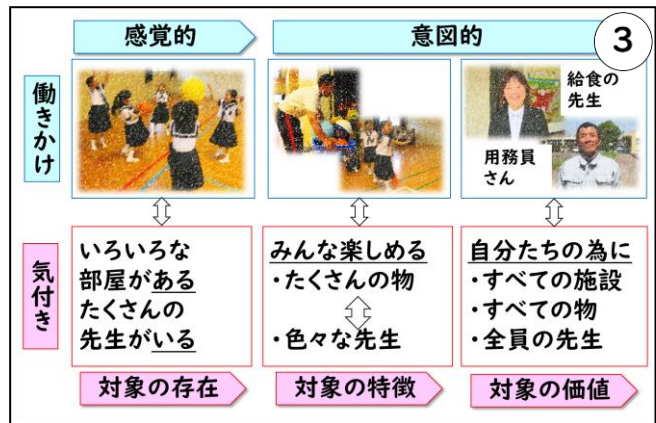
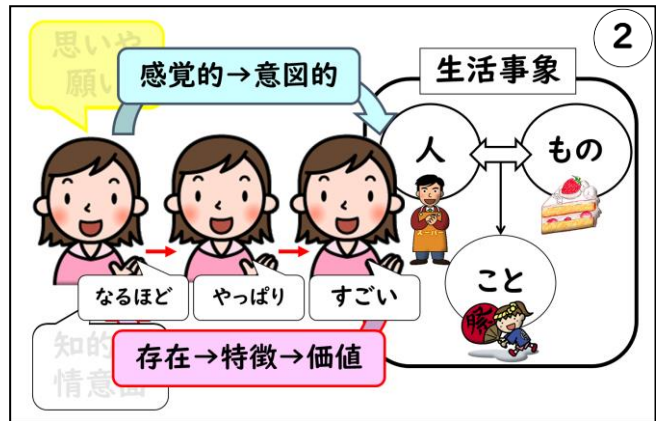
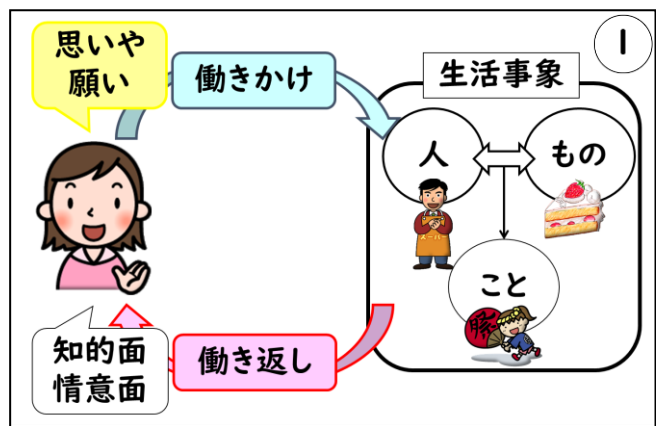
また、課題の一つとして、「気付きの質の高まり」があります。気付きが高まるためには、まず、思いや願いを持った働きかけが高まる必要があります。つまり、活動の高まりがないと、気付きの高まりは生まれません。充実した活動を行えば行うほど、子供は「言いたい」「書きたい」と表現意欲を持ちます。

大切にしたいのは、働きかけと気付きの双方向性のある高まりをもとに、対象と自分の心的距離が縮まることです。これまでの生活の中で自分とのつながりを意識していなかった生活事象を自分の身近に感じる事が目指す姿となります。そこで、右図②③のように、働きかけと気付きの高まりを設定する必要があります。働きかけの高まりとしては、「感覚的な働きかけ」から「意図的な働きかけ」へ。気付きの高まりとしては、「対象の存在」「対象の特徴」「対象の価値」となっていくことが考えられます。

子供が主体となって学びを進めていくことができる生活科の授業づくりを目指して、

○3つの資質・能力 ○内容 ○教材 ○単元構成 ○学習過程 ○手立て

について、これまでの実践をもとに、自分の考えをもてるようにしましょう。



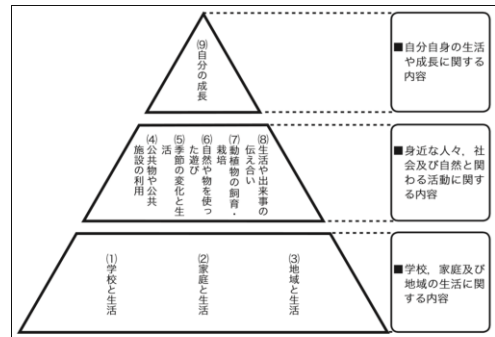
日々の学習指導は、「何ができるようになるか」としての3つの資質・能力を育むことが目標となります。

しかし、資質・能力は、一度の学習指導で育成することは困難です。

単位時間のまとまりとしての単元、単元のまとまりとしての年間や複数年間を通じて、系統的に学習を積み重ねていくのです。

つまり、私たちが毎日取り組んでいる学習指導は、年間を通して取り組む教科の中の単元、その単元を構成する単位時間というように、学習をつながりとまとまりで考える必要があります。

生活科における九つの内容の関係は、右図のような階層の形で表されています。それぞれのまとまりに上下関係があるわけでもなく、また、内容の大きなまとまり同士が分断されているものでもありません。また、学習の順序性を規定しているものでもありません。



生活科の内容のまとまり

生活科では、内容の全体構成に示した各内容の構成要素とその内容の大きなまとまりを意識して、単元構成を行うことに配慮する必要があります。

内容のまとまりと育成する資質・能力とのつながりとの関係を明確にすることが大切です。



各学校で作成している年間指導計画を見ても、各内容における縦の系統(2年間)、横の系統(年間)が明確になっています。

学習指導要領で大切にされているカリキュラム・マネジメントもまさにこの考え方につながっています。

	1学期				2学期				3学期			
	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
2年生	○生活科の学習【10】(1)(2) -1年生との交流	○大空(2)あか からの贈り物【20】(7)(8) -どんな贈り物で贈るのか -贈り物の準備					○うつく かしらのおもちゃ【22】(6)(8) -どんなおもちゃで遊ぶのか -おもちゃをいじって、おもしろさ -遊び方を工夫しよう					
1年生	○生活科の学習【10】(1)(2) -1年生との交流	○大空(2)あか からの贈り物【20】(7)(8) -どんな贈り物で贈るのか -贈り物の準備	○暮らしのたんけん【14】(3)(4) -まちのこまをさがす -まちのこまの作りかたを -自分なりに作りかたを -自然園にまよる		○暮らしのたんけん【14】(3)(4) -まちのこまをさがす -まちのこまの作りかたを -自分なりに作りかたを -自然園にまよる	○暮らしのたんけん【14】(3)(4) -まちのこまをさがす -まちのこまの作りかたを -自分なりに作りかたを -自然園にまよる	○暮らしのたんけん【14】(3)(4) -まちのこまをさがす -まちのこまの作りかたを -自分なりに作りかたを -自然園にまよる	○暮らしのたんけん【14】(3)(4) -まちのこまをさがす -まちのこまの作りかたを -自分なりに作りかたを -自然園にまよる	○暮らしのたんけん【14】(3)(4) -まちのこまをさがす -まちのこまの作りかたを -自分なりに作りかたを -自然園にまよる	○暮らしのたんけん【14】(3)(4) -まちのこまをさがす -まちのこまの作りかたを -自分なりに作りかたを -自然園にまよる	○暮らしのたんけん【14】(3)(4) -まちのこまをさがす -まちのこまの作りかたを -自分なりに作りかたを -自然園にまよる	○暮らしのたんけん【14】(3)(4) -まちのこまをさがす -まちのこまの作りかたを -自分なりに作りかたを -自然園にまよる

生活科の年間指導計画(例)

カリキュラムやマネジメントというと、教務担当や管理職が行うように受け取られがちですが、学校として育てようとしている児童生徒の資質・能力につながるように、日々の学習指導を構想し、実践していくことは、カリキュラム・マネジメントの大事な要素です。



年間指導計画をもとに、2年間又は年間というまとまりを意識して単元構成、授業づくりを行うには、どうしたらよいですか？

学習指導要領をもとに、単元で育成する資質・能力を明らかにしていきましょう。では、授業づくりについて具体的に考えてみましょう。



◇独立行政法人教職員支援機構「カリキュラム・マネジメント ～新学習指導要領とこれからの授業づくり～:校内研修シリーズ No54」で示されている指導案をもとに説明します。

目標に当たる単元で育成する資質・能力は、学習指導要領に示されている「内容」の「指導事項」をもとに記述あるいは転記するとあります。

この例からも分かるように、毎日の授業、その単元の目標は、学校の年間指導計画、学習指導要領に示されている指導事項としっかりとつながっていることが大切なのです。

では、手順に沿って授業づくりについて考えていきましょう。

★指導案は、教育課程の編成表に基づいて学校・学年で作成する。したがって、個人名の記入の必要は無い。
 ○ ○ 科 第○学年 学習指導案<例1>

1 単元で育成する資質・能力
 【この単元の学習で、身に付けさせたい資質・能力を記述する。】
 【学習指導要領に示されている「内容」の指導「事項」を基に記述する。】

2 単元の評価規準
 【学習指導要領に示されている「内容」の指導「事項」から、単元目標として適切な「事項」を選択して示す。<学習指導要領から「指導事項」を転記>】

知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	主体的に学習に取り組む態度
学習指導要領に示されている【知識及び技能】から、その単元で育成すべきものを選んで記入する。	学習指導要領に示されている【思考力、判断力、表現力等】から、その単元で育成すべきものを選んで記入する。	左に引用している学習指導要領の【知識及び技能】を主体的に身に付けたり（付けるとともに）、【思考力、判断力、表現力等】の中から、その単元の最重要課題を「～しよう」とししたりしている」として示す。

※実際の記述は、各教科の特性、目標の示し方に合わせて検討

3 単元名

4 単元の学習指導における具体的な評価規準
 【学習内容に合わせて単元の内容に合った具体的な評価規準を設定する】
 【社会、算数、理科等は、学習指導要領「内容」の「事項」が具体的に示されているため、「2 単元の評価規準」を示すのみで、「4 単元の具体的な評価規準」を示す必要は無い】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
例) ○○を理解している／○○の知識を身に付けている ○○することができる／○○の技能を身に付けている	例) 各教科の特質に応じ育まれる見方や考え方をを用いて探究することを通して、考えたり判断したり表現したりしている	例) 主体的に知識・技能を身に付けたり（付けるとともに）、思考・判断・表現をしようとしていたりしている

5 単元計画

具体的評価規準と評価方法		学習活動
第一	1 ここには、「4 具体的評価規準」を学習指導計画に沿って、3観点をそれぞれの「次」の学習	学習活動は、全ての時間の主たるもののみを記入する。また、上記三つの評価の観点に合った

児童が資質・能力を身に付けることができる生活科の授業づくり8つのポイント

- ① 子供の実態把握
- ② 内容の分析
- ③ 教材(対象)の設定
- ④ 単元の構成
- ⑤ 一単位時間の学習過程の作り方
- ⑥ 具体的な活動
- ⑦ 板書
- ⑧ 発問(声かけ)

① 子供の実態を把握

子供の幼稚園・保育所・認定こども園などでの学び、生活経験、学習内容を把握し、本単元での学習につなぐことが大切です。

まずは、本単元に関わる内容についての実態把握から始めましょう。

例) 「○○をしたことはありますか?」「○○へ行ったことはありますか?」

→子供の経験を把握する。(思いや願いをもたせる対象との出会いにつながる)

「どんなことをしたら、できるようになりましたか?」など

→子供の思考的側面を把握する。(働きかけや気付きの自覚につながる)



幼稚園・保育所・認定こども園などでの学びを捉え、生活科に生かすために…



幼児期「学びの芽生え」と

児童期「自覚的な学び」をつなぐ

スタートカリキュラム

スタートカリキュラムとは、小学校に入学した子供が、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通じた学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラムです。

入学当初は、学びの芽生えから自覚的な学びへと連続させることが大切です。生活科を核として楽しいことや好きなことに没頭する中で生じた驚きや発見を大切に、学ぶ意欲が高まるように活動を構成することが有効です。

② 内容の分析

生活科で捉える内容は、九つあります。
2年間の高まりを考え、本単元で捉える内容を明確にする必要があります。



階層	内容
■ 自分自身の生活や成長に関する内容	(9) 自分の成長
■ 自らの生活を豊かにしていくために低学年の時期に体験させておきたい活動に関する内容	(8) 生活や出来事の交流 (7) 動植物の飼育・栽培 (6) 自然や物を使った遊び (5) 季節の変化と生活 (4) 公共物や公共施設の利用
■ 児童の生活圏としての環境に関する内容	(3) 地域と生活 (2) 家庭と生活 (1) 学校と生活

内容(7)については、飼育と栽培の両方を2年間で確実に行わなければなりません。

いくつかの内容を関連させて単元を構成することができますが、子供の働きかけや気づきの高まりを明確にするためには、捉える内容を一つにして考えてみましょう。

身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりする
などして遊ぶ活動を通して、

具体的な活動や体験

遊びや遊びに使う物を工夫してつくり、

思考力、判断力、表現力等の基礎

その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、

知識及び技能の基礎

みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。

学びに向かう力、人間性等

2年間でまとめた各内容
が学習指導要領に記載
されています。

2年間の系統を考えると、
学年でのめざす姿が見
えてきますね。



内容(6)「遊びの工夫」

遊び自体

- ・大きさ
- ・長さ
- ・数
- ・色
- ・形
- ・位置

遊び方

- ルール
 - ・時間
 - ・場所 等
- 役割分担
 - ・審判
 - ・案内 等

(6)自然や物を使った遊び

- ・「遊び自体」の工夫…1年
- ・「遊び自体」「遊び方」の工夫…2年

という段階に分けてもよいのではないのでしょうか。

年間カリキュラムが大切

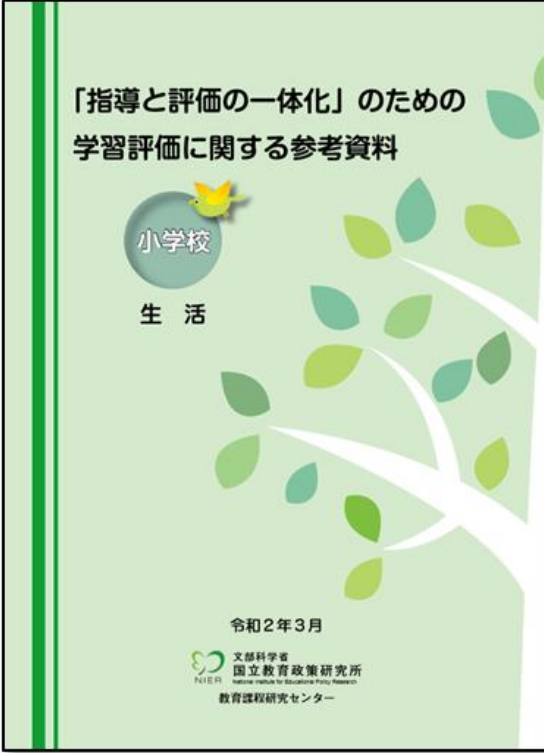
それぞれの内容を2学年の高まりで考える
→→ 学年でめざす姿が明確に

1年生…気付きの量を増やす
2年生…気付きを関連付ける

高まりを3つの段階に分けて単元構成
(対象の存在、特徴、価値)

指導と評価の一体化

学習指導を通して、児童生徒の資質・能力を育むためには、構想の段階で、目標を設定するだけでなく、それらの資質・能力が身についたのかを見取ることができるようにする必要があります。つまり、適切な評価規準を作成し、学習の成果及び学習の過程での姿を評価し、目標とする姿に向かっていけるようにすることが大切です。



学習評価の進め方について

単元における観点別学習状況の評価を実施するに当たり、まずは年間の指導と評価の計画を確認することが重要である。その上で、学習指導要領の目標や内容、「内容のまとめりごとの評価規準」の考え方等を踏まえ、以下のように進める。

- ①単元の目標を作成する
- ②単元の評価規準を作成する
- ③「指導と評価の計画」を作成する

《授業を行う》

- ④観点ごとに総括する

内容(6) 自然や物を使った遊び		
知識及び技能の基礎	思考力、判断力、表現力等の基礎	学びに向かう力、人間性等
身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、その面白さや自然の不思議さに気付く。	身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくり出そうとする。	身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。
内容のまとめりごとの評価規準		
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、その面白さや自然の不思議さに気付いている。	身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくり出している。	身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとしている。
学習指導要領解説生活編における内容に関する資質・能力の記載事項		
知識及び技能の基礎	思考力、判断力、表現力等の基礎	学びに向かう力、人間性等
遊びや遊びに使う物を工夫してつくり出すことで、児童が、遊びの面白さとともに、自然の不思議さにも気付くことができるようになることである。	試行錯誤を繰り返しながら、遊び自体を工夫したり、遊びに使う物を工夫してつくり出して考えを巡らせることである。	自分と友達などとのつながりを大切にしながら、遊びを創り出し、毎日の生活を豊かにしていくことである。
具体的な内容のまとめりごとの評価規準(例)		
知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<ul style="list-style-type: none"> ・身近な自然や物は、いろいろな遊びに利用できることに気付いている。 ・遊びの楽しさや遊びを工夫したり遊びを創り出したりする面白さに気付いている。 ・自然の中のきまり、自然の事象の不思議さに気付いている。 ・約束やルールが大切なことやそれを守って遊ぶと楽しいことに気付いている。 ・みんなで楽しく遊ぶ際、道具や用具の準備や片付け、掃除、整理整頓をしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・楽しみたい遊びを思い描きながら、遊びに使う物を選んでいく。 ・予想したり、確かめたり、見直したりしながら、遊びに使う物をつくりだしたり遊んだりしている。 ・比べたり、試したり、見立てたりしながら、遊びを楽しんでいる。 ・遊びの約束やルールなどを工夫しながら、遊んでいる。 ・遊びを工夫したり、友達と楽しく遊んだりしたことを振り返り、表現している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで楽しく遊びたいという願いをもち、粘り強く遊びを創り出そうとしている。 ・友達のをきき取り入れたり自分との違いを生かしたりして、遊びを楽しもうとしている。 ・みんなで遊ぶと生活が楽しくなることを実感し、毎日の生活を豊かにしようとしている。

2 「内容のまとめりごとの評価規準(例)」及び「具体的な内容のまとめりごとの評価規準(例)」

学習の成果としての姿は、単元の最後に児童生徒が「何ができるようになればよいか」を児童生徒の姿として考えていきます。学習の過程での姿も単元終末の子供の姿のイメージからスタートして、そうなるためには、「そこまでこんなことができている必要がある」「ということは、その前の活動で」というように、児童



生徒の学習の姿を単元の終末から逆向きに構想していくとよいでしょう。そうすることで、目標達成に向かう学習の道筋を児童生徒の姿として考えることができます。

では、どのタイミングの児童生徒の姿を評価規準として設定すればよいのでしょうか。

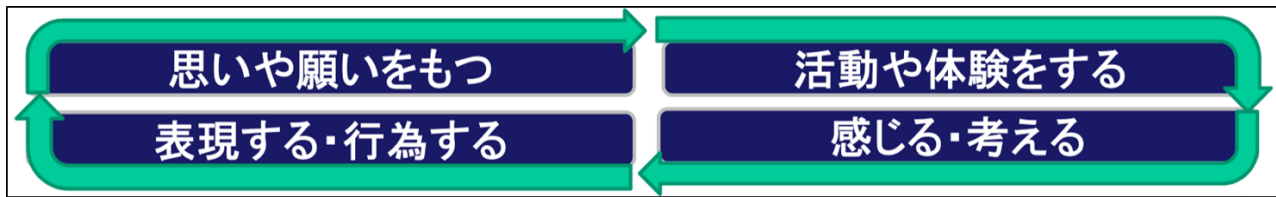


先に示した指導案例(「カリキュラム・マネジメント ～新学習指導要領とこれからの授業づくり～」)では、評価規準や評価方法などを単位時間ごとではなく、学習のまとまりで設定しています。このような学習のまとまりをイメージするには、各教科等の特質に応じた学習過程に照らして考えるとよいでしょう。

5 単元計画		具体的評価規準と評価方法	学習活動
第一次	1	ここには、「4 具体的評価規準」を学習指導計画に沿って、3観点をそれぞれの「次」の学習活動にあわせて、配置する。	学習活動は、全ての時間の主たるもののみを記入する。また、上記三つの評価の観点に合った学習活動とする。
第二次	2	<ul style="list-style-type: none"> この単元(教材)の学習の過程の中で行う三観点の評価を取り出して、その評価方法と共に示す。 「具体的評価規準」は、単元の評価規準に基づき、各学習のまとまりで行う評価の規準として示す。 	<ul style="list-style-type: none"> 「学習活動」は、時間毎に児童が行う具体として示す。 学習のまとまりを整理して、単元(教材)全体の学習がどのように組織されているかを示す。
	3		<ul style="list-style-type: none"> 「思考・判断・表現」の評価を行う活動には、必ず言語活動を学習活動として取り入れる。 言語活動には、記録・要約・説明・論述・話し合いの活動を入れる。
	4		
第三次	5	<ul style="list-style-type: none"> 「主体的に学習に取り組む態度」の評価は、その単元での学習を通して育成すべき資質・能力であるので、単元の学習の最終段階で行うことが多くなる。 	<ul style="list-style-type: none"> 「振り返り」は、見直しについて行うものであって、そのためには、時間毎の学習についての見直しを明示することが必要である。そこで、時間毎の主たる学習活動を示すことが求められる。
第四次	6	<ul style="list-style-type: none"> 評価は、1時間のみで行うものだけでなく、数時間にまたがる評価もあり得る。 「思考・判断・表現」を評価するところでは、必ず言語活動を学習活動に入れる。 	
	7		
	8		
	9		
	10		

* これまでの1時間単位の指導案ではなく、単元全体の中にそれぞれの教科が求めている、「評価の観点」が見えるような指導案が求められる。

生活科の学びのプロセス



生活科の特質に応じた学習過程は、上記の学びのプロセスに示されています。

子供が思いや願いをもち、その思いや願いを叶えるために対象へ働きかけ、自分とのかかわりに気付いていくのです。

そこで、「思いや願いをもつ子供とは?」「どんな活動や体験をしている姿?」といったように、単元を通じた具体的な子供の姿をもとに学習過程を構想していきましょう。そうすることで、「目指す子供の姿になったかな?」と、評価することができます。さらに、評価した子供の姿をもとにして、支援の改善も行うことへつながっていきます。

つまり、学習者主体の学習指導を構想する上で、評価を大切にすることが重要になります。

学習評価

学習評価は、何のためにあるのかを確かめておきましょう。

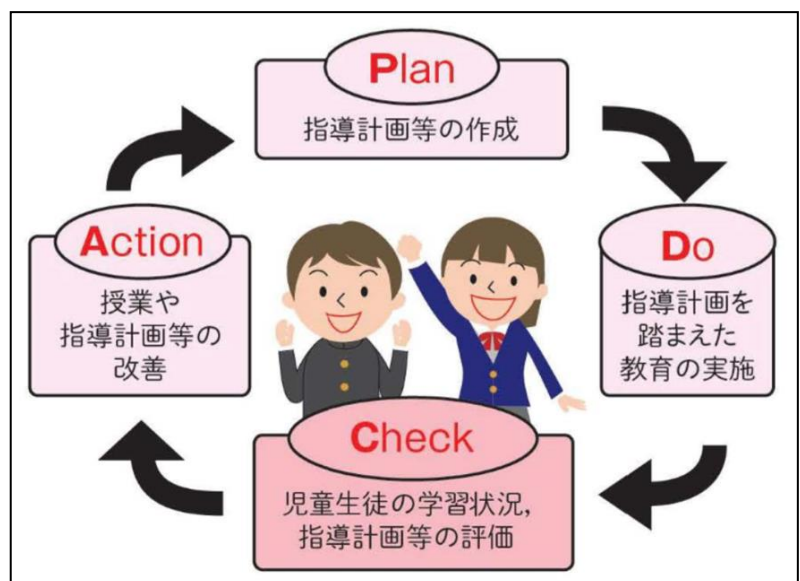
学習評価は、「児童生徒にどういった力が身に付いたか」という学習の成果を的確に捉え、教師が指導の改善を図るとともに、児童性自身が自らの学習を振り返って次の学習に向かうことができるようにする」ために行うものです。

つまり、学習評価は、教師の指導改善につながり、児童生徒自身の学習改善につながなければ、本来の役割を果たしたとは言えません。

カリキュラム・マネジメントの一環としての指導と評価

各学校は、日々の授業の下で児童生徒の学習状況を評価し、その結果を児童生徒の学習や教師による指導の改善や学校全体としての教育課程の改善、校務分掌を含めた組織運営等の改善に生かす中で、学校全体として組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を図っています。

このように、「学習指導」と「学習評価」は学校の教育活動の根幹であり、教育課程に基づいて組織的かつ計画的に教育活動の質の向上を



を図る「カリキュラム・マネジメント」の中核的な役割を担っています。

「支援」と「成果の把握」

評価を二つの側面から考えていく必要があります。一つは、「成果の把握」としての評価です。もう一つは、支援として評価です。これまでは多くの場合、評価というと、成果の把握として捉えているのではないのでしょうか。例えば、学期や単元の終末に結果として行うこと、あるいは、成績をつけること、というイメージをもっている方もいる

のではないのでしょうか。それは、総括的評価として評価です。学習者主体の学習指導において、大切にしたいのは、総括的評価に加え、学習者に寄り添い、支援する形成的評価です。

つまり、学習過程の中で、学び手がどのように向上したのを見取り、支援する評価ということです。学習の結果を見取り総括するだけでなく、学びの過程そのものを重要視し、学び手がいかに学ぶかを支援するという積極的な指導者のかかわりを含む評価です。

学び手である子供たちの学びに寄り添い、支援し、学び手をよりよくしていく、それが、評価が児童生徒の学びに生かされることであり、教師の指導改善に生かされるということです。

児童生徒にとっても、教師にとっても、学習指導の質を高めるためには、評価を重要視して、学習指導を考えることが必要だということです。



活動後を書く「カード」や発表等だけで、評価していたような…
「学びに寄り添い、支援する」ためには？

まさに、生活科の課題ですね。学習過程での評価はこれまで説明してきたように、「何ができるようになるか」を設定して、「単元でも子供たちの思いや願いは？」「思いや願いを叶える対象への働きかけの高まりは？」「気づきの高まりは？」を明確にしましょう。そうすることで、『いつ、どんな支援を行えばよいのか』が見えてきます。



そのための教材について考えていきましょう。

③ 教材

生活科の教材は、活動そのものです。いくら周りに色々なものがあっても、子供が思いをもってかかわらなければ教材となり得ません。



子供が対象と出会い、対象に対する思いや願いをもつことで学習が始まります。

内容分析(捉えることを明確)をして、出合わせる対象を選定することが大切になります。

- ①児童が興味や関心があるもの
- ②児童の思いや願いが高まる可能性があるもの
- ③具体的な学習活動が想定されるもの
- ④学び合いができるもの
- ⑤学習活動の繰り返しが挙げられています。

以上のことから、子供が思いや願いをもった活動が連続・発展していくことを考えて対象を選定することが大切であることが分かります。

また、2年間の高まり(量や関連付け)を考えて対象を選択します。

【例:内容(6)自然や物を使った遊びの工夫】

	遊びの工夫	相手意識	遊びの多様性	友達とのかかわり
1年生	遊ぶもの	自分が楽しむ	3つの遊び	一緒に
2年生	遊ぶもの ルール	自分→自分たち →他学年	6つの遊び	協力 役割分担

④ 単元構成

生活科では、子供の対象への思いや願いをもとに、気づきの質(量、関連付け)を高めることができるような活動を位置付けます。



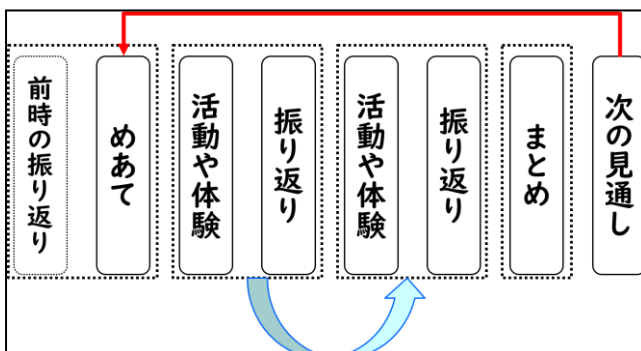
気づきの質を高めるには、その高まりに伴う対象に対する働きかけが(感覚的→意図的へ)高まる大切です。

子供が「もっと～したい」と思いを膨らませることにより、働きかけが意図的になります。

→活動や体験後に振り返りを行い、次の働きかけの見通しを持ちます。そして、意図的な働きかけから気づきを増やしたり関連付けたりします。これらを繰り返し行うことができる単元構成を行う必要があります。

⑤ 一単位時間の基本的な学習過程

生活科では、具体的な活動や体験と振り返りを行い、次の働きかけの見通しを持つことができる一単位時間の学習過程を大切にしましょう。



◆一単位時間の最後にもつ「次の見通し」が次の時間の「めあて」になります。

つまり、授業の最後に「次にしたいことを『自己選択』させることが大切なのです。

◆「活動や体験」と「振り返り」を繰り返すことにより、前半での「振り返り」を後半の「活動や体験」に生かすことができます。(働きかけの高まり→気づきの高まり)

⑥ 本時の具体的な活動

生活科では、具体的な活動や体験を通して、気づきが増えたことや関連付けたことを自覚させたい学習場面に、次のような活動を位置付けます。



■具体的な活動や体験を振り返る活動

- ① 言語表現…絵や言葉を使ってカードに表す。(絵と文のカード、吹き出しカードなど)
友達(同じ・違うグループ)や GT と伝え合う。
- ② 身体表現…実物を使って「やりながら」伝える。



◆自分が活動したことや体験したことを「言葉や体」を使って表現することにより、無自覚だった気づきを自覚することができます。そして、体験と振り返りを基にして、次の働きかけの自己選択をさせましょう。

花やさいを そだてよう

2年 くらみ 名まえ

絵

こんにちは やさいに!!

わたしはトマトをそだてたいです。1つもおせわになつていろいろあつたおとうさんにもとえかあになつてもらいたいからです。それと、わたしはトマトが大好きだからです。わたしは、いっぱいお水をあげてはやくできたとおもいます。あまみトマトにしたい

文

吹き出しカード

こんなことしたいな。

こんなことできそう。

むずかしいからあもしろい。

今日のつづき

できなかつたから

つづきの

ロープのふとさをふとくする

招のかいむずかしい

小さい石を見つけるところがあたりなかつたりする。

ブランコの大きさを大きくする。

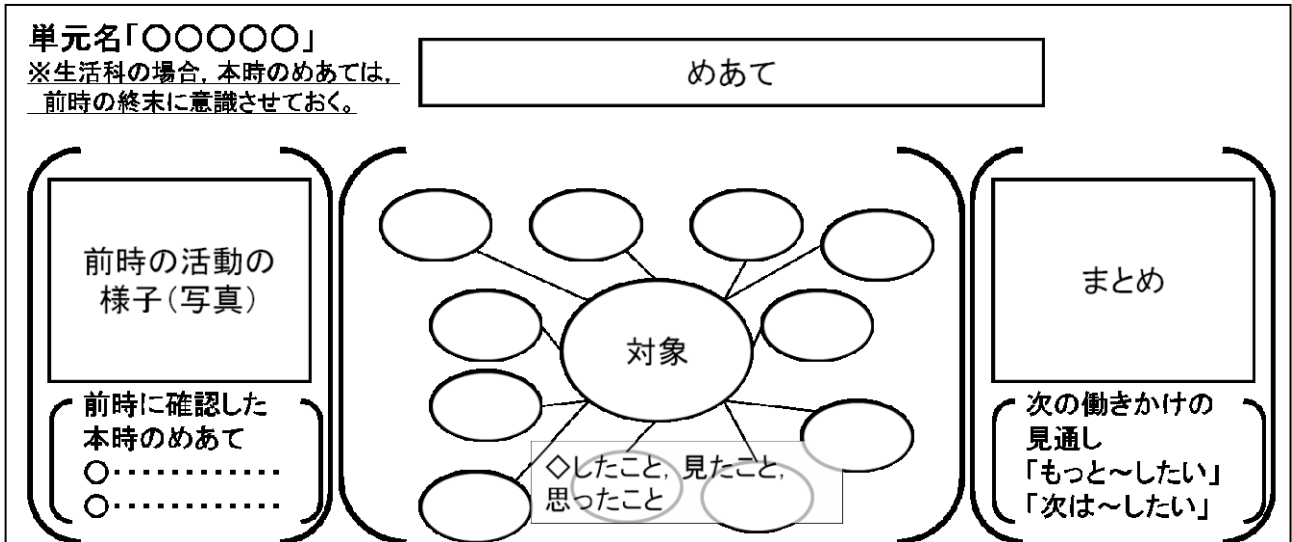
学習カードには、「絵と文」(上記の左)と「キーワードを集める」(上記の右)の2種類が考えられます。「絵と文」のカードは、子供の思いや願いを十分に表すことができます。「キーワードを集める」カードは、効果的・効率的に活動の記録をしたり、友達と焦点化した話し合いをしたりすることができます。また、「絵と文」のカードは単元の初めと終わり、「キーワードを集める」カードは働きかけのまとめでといったように、単元内で使う場面を分けてもよいと思います。

つまり、「子供に何を表現させたいのか」、「子供はどんな表現をしたいのか」を明確にして表現方法を選択しましょう。

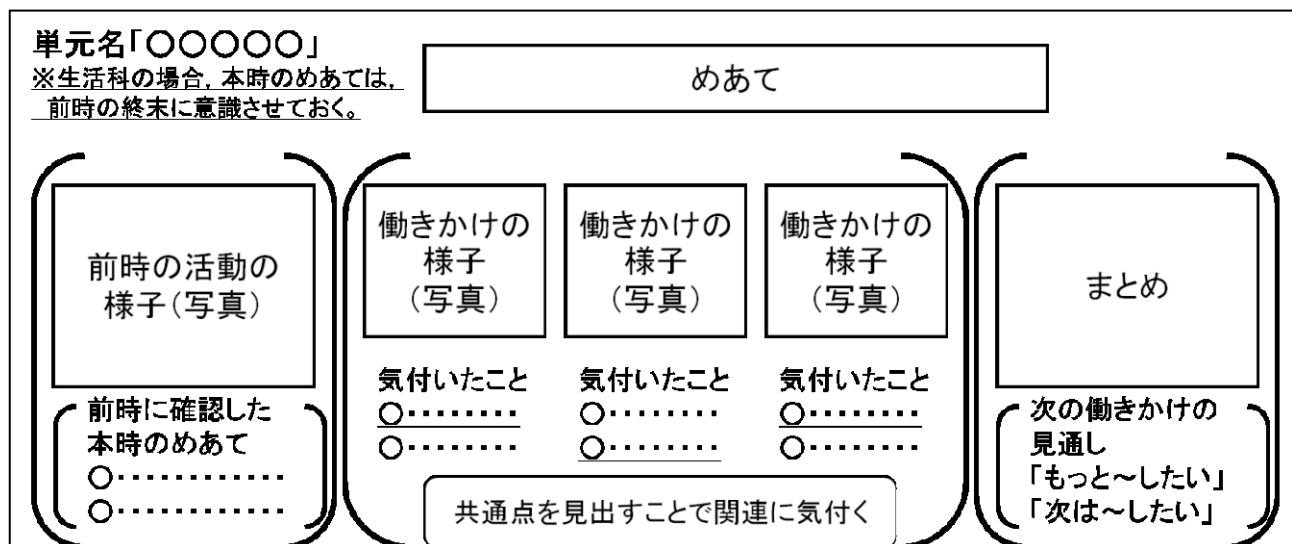
⑦ 板書

生活科の板書は、気づきを視覚的に捉えさせることが大切です。

◆気づきの量が増えたことを自覚させる板書



◆気づきが関連していることを自覚させる板書

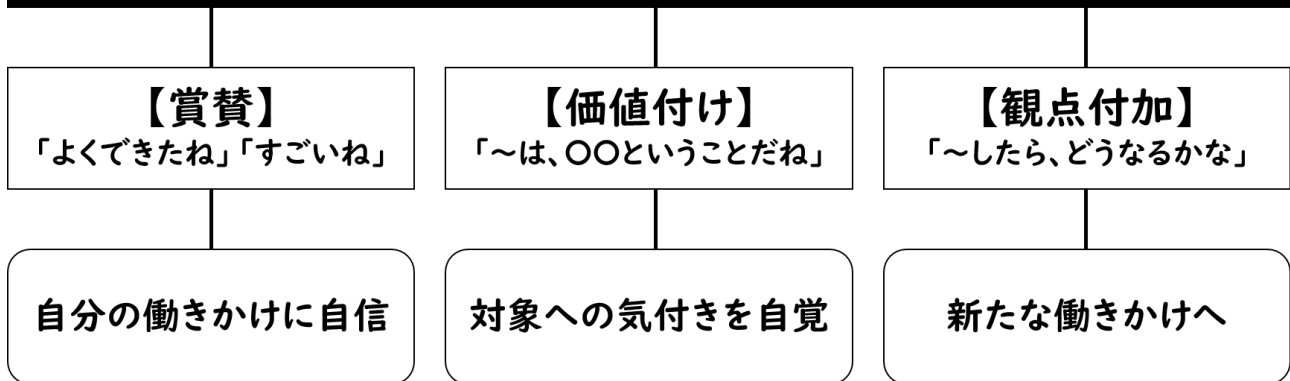


型通りに板書したり、写真や資料をたくさん貼ったりすることではなく、
子供に自分の働きかけや気づきを自覚させることが大切です。
また、情報量にも気を付けましょう。



⑧ 発問（声かけ）

子供の活動を「賞賛・価値付け・観点付加」する声かけが大切です。



◆子供が活動しているときに、教師が意図を持って声かけを行うことが大切です。このことにより、子供の対象への働きかけが高まり、「さも、自分でしたかのように」感じるこゝへつながります。

【生活科の学習の特質】

生活科の学習

直接体験を重視した学習

直接体験する活動が目標であり、内容であり、方法である。

身の回りの人や社会、自然、自分自身を含む「くらし」そのものと繰り返しかかわる

体験と振り返りを繰り返す学習

体験したことを体や言葉で表現する

《思考と表現の一体化》

対象へのかかわりを連続・発展させる

《気づきの質の高まり》

生活科の学習の特質を踏まえ、子供の自ら学んでいくことができる授業を目指しましょう。